

戦時下の聾啞者

講師 御所園 武雄氏

(名古屋市在住・鹿児島県出水市出身)

「わしの顔を知っている人が居るか？右手を上げて下さい。よし、始めよう！わしの名前は御所園と申します！（額の上に片手を丸く回して名前を手話表現）よろしく！」（キビキビした大きな手話表現開始）

わしの家族は両親（聴者）兄弟は5人（その中で4番目は難聴者、2番目、5番目は聾者）でわしは5番目で末っ子だった。しかし、両親が聴者でも学校へ行けず又はわしを含めて聾兄弟も学校へ通わせてもらえなかったのは、うちが貧しかったからなんです。お分かりください。（参加者たちを見つめる様子）わしは恥かしいだけでなく、もっと苦しい貧乏を味わったが、人間・肝っ玉が大きい（度胸がいい）方がいい。わしはこの場で話すことができる。わしの講演を見てもらえば嬉しいです。



うちの両親が貧しい暮らしの為、わしも苦しんだ。特に兄からお下がりの学生服がボロ着れでいつのまにか、ボタンが一つ一つ外れてしまって一番上のボタンが一つだけ残っていた。肘も膝もお尻部分も破れ段々とボロ布を数多く付けた位！なんと服を洗えたと言えれば年中1回だけで、すごく臭くてたまらなかった。服のボタンが取れて無いので、自分で穴にひもを綱目に通して着ていた。

わしが7歳の時近所の子供たちは4、5歳でわしが一番大きかったが、うちは貧しいから両親が畑仕事働いているのでわしが手伝いで芋を茹でたり、売ってた。母の炊事用かまどに薪木を入れて炊きながら大きな鍋に芋を入れて塩を振って熱くなった鍋の耳をあげたら芋を取り出してわしのボロ着のポケットの中に数え切れなく、熱い芋を入れた。芋が美味いから、外へ出ると食べ物を交換する方法を考え出した。ある子と飴玉を交換できた。「交換できないなら遊んでやらない！」と脅かした。

わしの好物である飴玉を口にすることが出来た時は、一番嬉しくて今になっても、思い出が忘れられない。

近所の小さな子供たちと侍ごっこをして遊んだりした時わしは近所の子供たちより一番年上だったが、両親が薪木集めに山に行った時、わしは7歳だったが一人だけでイモを茹でたという毎日だったので今も記憶があります。近所の子供たちが小学一、二年、学校へ行くようになってからわしも8、9、10、11歳に成長したのに貧しさで学校へ行けず、差が開いた為に虐められて家に閉じこもっていた。両親が山で薪木採り、鶏飼いや次々と仕事が増えた。

ある日近所の子供たちとウラの見回りした時に「あのミカンの木は僕のものだからおま

えが好きに取って食べていい！」と巧い話の疑いが知らず、登ってミカンを取り出して食べたわしがだまされた！そのことを近所からのウワサで耳にしたうちの母がわしを連れ、罰でお腹にお灸をすえられて痛みが耐えられなかった。「くそ！うまく毘にはめられた」と叫びたくても伝えられなかったことの悔しさを覚えている。お母さんが「いいかい？又、おまえが盗んだら、手に箸をプツツンと刺すからやれなくなる！

又、あと片手も同じにこうなるんだ」と言われてこのような二度としてはいけないという体罰で教えられて、わしがいけない事を分かってきた。

近所の子供たちと馬跳びごっこで遊んだ時はわしが服を洗ってないから、跳ぶ時は馬役をした子供達はほとんどは鼻をつまんでやった。(参加者たちに「わかるかい？」と伝える) そうなんだ。特に下半身なんか臭くてプンプンと広がってしまう。しかし、風呂に入れたのは1ヶ月1回だけ！うちは貧しいから、金もない。(大きくうなずいている様子) それに、わしの兄弟中で聾啞者は2人が学べずあと3人は小学6年まで、中学校へ行けなかった。わしは様々なことを苦しみながらあれこれ、やっても聴者たちから殴られたり、いじめられたりというような繰り返しの毎日だった。

「どうやって暮らしが楽になるか？」と方法を閃いた。わしが枯れた松の木から落ちた松葉を拾って束ねて売る為に家へ持ち帰る毎日の繰り返した。かまどの焚き火で紙とか火をつけてもすぐ消えてしまうから松の方がすぐ燃やすすいし、長続き出来るから役に立つと思って山へ往復しやり続けていた。

母は豆腐手作り、父は養鶏から生み出した卵を売り、家業は貧しくてわしも毎日山を越えて遠くへ往復して松を集めてくる仕事をやりながら、父が貯金箱を竹筒でこしらえて小銭を貯めていた。

そして父がお正月を迎えると、貯金箱竹筒を壊し開けた小銭を母が縫った袋布の中に入れた物を持ってみたら重い！わしが山へ往復で働いたんだから、母に「金をちょうだい」とねだっても母からは「なんだい？お金が無いんだ！おまえがわかるかい？木を切るために貯めるんだ」と言われた。

しかし、わしは何のために働いてるか？と納得できず「10銭でもちょうだい」と「ダメ！くだらない物には出さない！食っていくために家の為にある！」とピシャリと言われた。その時はわしが字を書けず、読めず、やっても役に立たない！頭が悪いし、聴者からいじめられただけではなく、両親からも愛情を注いでくれたこともなかった。我慢をこらえてやっと貯めたお金を両親が山の木を切って細かく切った木をしめて売った。山の急坂でも必死に往復した。わしが一休みしたり、片道に渡ったならば約2時間で又、戻って渡ったなら2時間(往復4時間)に歩き続けた。又、貯めたお金で子牛一頭を手にした。雨が降った後、草をきったのを細かく切り分けたのを子牛に食べ物を与えて育てながら大きくな

った。母が山の木から切り落とした枝を縄でまわしてまとまったのを薪を作って後ろに左右と次々に背負いながら働き続けた。

わしが成長していく間に働いたお金が貯まったことを知っていた。8、9、10歳になったが、雨が降っても休みがなくカマで草を切ったりまとめて棒でぶら下げて持ち歩いた。

もちろん、昔は貧しかったからリヤカーも農家用の車も無かった。その時、両親がこっそり、お金を貯めたのはわしの兄さんの結婚資金の為だと母から身ぶりで行われた。わしは意味が分からなかったが、うなずいてた。

時が過ぎてわしが山へ働きに行くのも飽きててこっそりサボったり、休んだり、遊んだりしたのを母にバレた時、「そうかいな、おまえは家から出て行ってもら。メシも食わせてやらん」と言われた。母がわしを引っ張って養鶏小屋に閉じ込められた。翌日の朝まで・・・寒くて寝転がしたわしの身だしなみは全て鶏の糞だらけで臭いのが消えなかった。更に、わしが寒くて眠れず夜が明けた時、コンコンとセキが止まらず眼も真っ赤で発熱が上がりっぱなしで母がいつもの顔で熱く真っ黒になった煮えた梅を熱いお湯の中に入れてクルクルと回すと梅の焦げが広まったので、飲むと歯が黒くてくっついてた。それを飲み続けたら3日後に治った！それは母の知恵で昔は貧しいから、薬を買えずこういう知恵を暮らしは生きる為だった。梅を煮るときは鍋じゃなくて炭で切り組んだ薪木の上に入れて長い時間に煮ると灰の中で赤く燃えた梅をお湯の中に入れると柔くて種も溶けて残らず飲みやすいです。

いつのまにか、わしの家はもともとボロだが、大雨が降ったせいでますます、ひどくズレタリして暑い時はボロ家に透き間が通った為に冷たい風が通ると耐えられず寒かっただけでなく、我が家は綿の布団が置いてなかった。代わりに稲のワラを詰め込んで布団にしていたが、寒さに防げず足も冷たいので体中、丸く引っ込めて寝た。しかし、こんな毎日だから、眼が赤くなり、せきも治まらず「コンコン」と高いセキを聞いた近所の人が驚いて「こりゃ あんた、死ぬんじゃないか？」と言われるほどセキが続けていた。山へ薪木採り、松葉拾いの仕事を一日でも休むこと許されない。一日でも休むと、母が私を寒い雪の日でも小屋に閉じ込めた。足指が凍ってしもやけの痛みが耐えられず閉じ込められた小屋のドアを「開けてくれ」と何度も叩いたが、母は完全無視の様子で朝明けに迎えたが、凍った足指を母が温かいお湯の中に入れた時は、足指がタコ踊りのように動いた！発熱、梅を飲んだり、繰り返したが、死にそうになった時もあった。母が松葉で火をおこし、米を小さい粒になるまで押して煮た「おかゆ」を食べたら、すっかり良くなった。やはり、自然食は体にいい。

9歳、10歳、相変わらず山へ働き続けた往復の毎日だったが、ある日11歳の時は大雨が降って山へ行けず、近くの橋の側通ってみたら、小さな製鉄所でヒゲを生やした親方らしい男が工場のガラス戸越しに作業をしているのが見えた。機械も珍しくて下に石を置いて木壁より上がったら、前より見えて特に動き回っている機械を見るのが珍しくて釘づけになってしまった。作業をやっているヒゲ男が何度もわしを見て「●☆▲■」と話し掛けたが、わしは分かるふりで顔をうなずいたり、振ったり「どうぞ、聾啞者と知られたらあっちに行け！」と追いやられる。今までにもそうだった」と思って恥かしくて言えなかった。(参加者たちに「昔と今は全く違う！昔なんか手まねを使うと周囲から笑われるから！今は全然気にしないのでいい！」と伝える様子)

しかし、わしが聞こえないことを作業のヒゲ男が気付いたらしく「来い！」と身振りで行われてびっくりしたが、早速製鉄所へ行ったら「やってみるか？」と機械で鉄を削った

り、ドリルで押して穴を開けたり作業をやってみたら面白くて無我夢中だった。その時、昼食の匂いがした。今まで嗅いだことのない、あまりにもいい匂いなのですごくが空いてしまった。うちは貧しいので魚も肉も買えない。野菜ばかり（農業中心）食べていた。魚といえば煮干しばかり。魚もウナギも食べられなかった。ウナギの匂いが美味しいの、きっと食べたなら美味しいだろうと思っていたところ、昼時間となり、製鉄所のおかみさんから「食べに来なさい」と言われた。はじめは遠慮したが、嬉しくて何度もお代わりを食べて腹が一杯になった。又作業時間に戻って、もう夜6時になったら又「こっちに夕食を食べなさい！」と言われて別の魚料理。匂うだけでたまらなくて作業を終えた後、又ご馳走になって何度もお代わりして満腹した。

家に帰ったら母が夕食の用意をしていた。「夕食は要らない。製鉄所に働いてるひげを生やした男から食べさせてもらった」とわしが手まねで話したら母が「まさか、おまえは盗み食いしたろう？」と問いつめられて聞かれたが、信じてもらえず、「違う！」と話し合っても通じず、結局はわしの体を棒で叩いたりお腹にお灸をいくつもすえられた。

そのことが気になってしばらく製鉄所へ顔を出さなかったわしが久しぶりに雨の日行ったらヒゲ男に「来なさい！」と言われた。「だめ」と手を振っていくつもお灸をすえられたお腹を見せたら「おや、どうした？」と言われてわしの家まで案内（ヒゲ男は自転車、わしは走った）した。ヒゲ男がわしの家（超ボロ家ですれている）を見た時は凄くてショックだった。布団はボロ布の中に稲ワラの葉を詰め込んだもの。床は竹の柔らかいのを編んで織ったもの。畳がないので米の袋の麻をつないで敷いたものだったので、冬になると透き間風が入ってすごく冷えていた。（参加者たちに「皆さん耐えられるか？」と言う様子）わしの回りの家で一番ボロ家、ボロ着れでひもじかった！ひげ男が経過（わしが製鉄所へ覗きに来たとか、料理を何度もお代わりしたとか、お腹にお灸をすえられて言った等）を話して両親が大笑いしたが、この事情を知ったヒゲ男が「奉公に出さないか？」と話したら父は認めたが、母だけ「まだこんな小さい子供だと」と反対した。ヒゲ男は「まあまあ、仮に見習いで働かせては？初めての作業はていねいに教える。2、3年後次々と仕事をやる。試してもダメなら、クビにする」と熱心に説得したら認めた。母から「いいかい？おまえがまじめに働くんだ」と言われて自分もみじめな貧しい暮らしから頑張っって働いていこうと思い、通い続けてきた。

少しずつ技術を磨いてきたら、13歳の時やっと正式奉公することになった。機械は危険なので油断すると指が斬れてしまうから気をつけてきたがある日作業中に油断してケガしそうになった時ヒゲ男が「ばかもの！気をつけろ！」と平手ビンタ（油のついた黒い手）された時はわしの顔が黒く平手ビンタの形が付いてた。わしは泣きベソかいてると又、足を蹴飛ばされ、「顔を洗って来い！」と井戸端に行って又、泣けそうで「泣くな！バカ！」と怒鳴られて耐えていた。前に母から「聞こえない息子でも、厳しく育ててください。」とお願いした通りで厳しい毎日の作業だった。

その時はわしが「なぜ、わしだけにひどい目に合わされるとは？母からも近所たちからも製鉄所のヒゲ男までわしを虐めているとは？納得できない！」と悩んでいて仕事をサボろうとしても母が「家から出てって！メシもあげない！ほら、3年も過ぎたら慣れるの

よ！耐えて頑張ってお金を貯めるのよ！」と言われた。月給はたった五銭だとメシ代だけで飛んで行ってしまう！そうなんだ！（参加者たちに「今は高く給料をもらえるからいいだろう！昔はわしが一番下の身分（子供で見習い中）だから五銭をくれたんだ。」と言う様子）メシ代だけで使えたが、服を買える余裕がない！ようやく7年が過ぎたが、聴者の場合は5年過ぎると、もうベテランになって高給をもらっているのに聾啞者は話を通じないから時間がかかるというわけで給料は三十銭（一人前の給料なので昼食は出なくなった。弁当持参）をもらっている。そういうつらい思い出があるんだね……。11歳から13歳になって働き通いながら「3年目になるとはよいことだ」と言われて従っていたが、この仕事を一筋に働こうと決意した。

15歳の時はわしの生涯としては衝撃的で今も忘れられない！なんと、わし宛てに赤い紙の召集状が届いてきた！それを見て「兵隊になるんだな！聴者は国のために戦場へ行くだが、わしなんか聾啞者だと、兵隊に採用されるわけがないなあ」と首をかしげながら兄に聞いてみたら「ああ、聾啞者はムリだな 銃を撃つ等音が聞こえないからダメだな」と言われて「やはりなあ」と、この赤い紙召集状を破って捨てようと思っただが、兄は「いかん！破って捨てると国の反逆者になるから逮捕されるぞ！まあ、取りあえず、身体検査でも受けてみる！落ちてもいいから行って来て！」と言う。わしは「今までに列車に乗ったことがないから交通方法も知らねえ！」と言ったら、兄は「この駅から五つ目の駅に降りるんだ！」と言う。でもわしなんか、読み書きもできないし行けるわけがないなあ！と思った。

わしと同じ年齢である近所の方々に「おい！あんた、赤い紙召集状が届いてたか？」と尋ねてみたら「ああ俺は海軍兵になるんだ」「僕は航空兵に入るよ」「陸軍へ行くよ」「砲兵！」等6人から言われた。この方々は16歳、18歳、19歳、わしは15歳で最低年齢だった。



軍需工場の仲間と休憩時間に軍事訓練した記念に撮影

徴兵検査の日に集まってきた中でまず始めに、適性検査は難しい筆記試験の問題だらけでわしは読み書きが出来ず、心底が悔しかった。「わしが兵隊出征したらりっぱな姿を今までにわしを虐めた人たちに見返したい！」と胸がふくらんできたが、現実的にかかりました。まわりの人たちが一生懸命問題を解いているのを見て、ますます肩を落とした。試験中左右の隣に、前の人に、後ろの人にちらっとカンニングを試してみたら真似して書けたが、バレて文句言われて実行中止したが、テスト用紙に書けたのはたった3つだけで後は空欄だった。「わしの夢が敗れた……。いじめた人たちにわしの勇敢な兵隊姿を見せたいのに！！どうせ、落ちるんだ！」と諦めた気持ちを込めて面接を行ったときも軍隊上官から聞かれたが「わしは聾啞者です。読み書きも出来ないし、無学です。うちは貧しか

ったから」と手まねしたら「なに？おまえは聾啞者か？そうか」と軍隊上官たちが3人で話し合っただけというまに落第した。

次は最後の身体検査を受けた時は軍隊上官たちが驚いていた！わしの体中が鍛えた筋肉で「おまえ、見事に筋肉を鍛えているな！しかし、聾啞者だとはな・・・」と無念そうに言われた。「わしは小さい時から山奥へ通い働いたから胸、肩、もも、足も筋肉を作り鍛えたんだ！そうそう、身体検査を受けた周囲の人たちは胸が平べったい、ガリガリ、ムダな脂肪が出ている方が多く、わしみたいな鍛えた筋肉のある人が居ない！どうせ、裕福な家庭に育ってきたのだろう！」と叫びたい気持ちだった。

その時は軍隊上官たちが「おまえ、りっぱな身体しているのに、聾啞者はなあ・・・まあ、身体検査で続いて受けてみる！」と指された時はわしは嬉しかった。さっさと身長、体重、次は握力テストをやってみたら、すごい96も上げてた！他の人は50～60位だった。次も肺活量を受けてみたらそれもすごい！体格がいい人でも、真っ赤な顔になり、出した結果はたいしたことはなかった。次はなんと男根を指でつかんでネジを回すようにグルグル捻られた。青く腫れるほど痛いけど、一生懸命耐えて軍医が「問題無し！」と、もし、ねじると鼻水みたいに出たら・・・「不合格！」ということで学力が良かった人でも良い体格でも落ちた！次は肛門検査の有無を調べたら「問題無し！」もし緩めると戦場に出ても身体が持たない！落ちた人から「おまえはすごいなあ 体力！おまえの身体を取り換えられたらなあ」とひがみに言われて気分は最高だった。しかし、聾啞者で戦場へ行けずに後ろめたい気持ちだった。

翌日はなんと、速達で軍需工場の勤労働員通知が届いた時は「おお！わしを分かってくれたんだ！」と心臓の音が高まって、夜になっても興奮気味で眠れないままで朝明けになった。この通知をお兄さんに見せたら「そうなんだ。おまえは聾啞者だから戦場へ行けない代わりに国の為に、軍需工場の軍艦、航空、陸軍等の武器作りで働くんだ」と言われた。

わしは銃の弾丸（小サイズ・一日で500個）を製造していた。もちろん、軍服を着られたが、わしが一番にチビで皆は大きかった。なぜならば、わしは生まれた時から家が貧しいので魚も肉も食えず、野菜だけだから栄養不足でこうなったんだ！本当に15歳なのに、小学3年の体格並に小さかったけど筋肉は鍛えてきた。複雑な気持ちであった。そして、身体が小さいせいで軍需工場用の軍服を着てもダブダブで手足の長さが及ばなくて縫い直してくれたが、軍帽子もブカブカで小サイズをかぶせられた。身分等級を示す胸章（ポケットの飾り部分）は何も無く、たった黒い色のみで軍需工場に働き始めた。

ところで上官からの説明によると「諸君！軍需工場に働く時は一日中よく励むんだ！」だが、わしは何も聞こえず分からなかった。「一日中の規則は起床は朝5時、就床は夜10時」しかし、軍需工場は軍隊と同様で朝5時前に起床ラッパの音で飛び起きるようにしてるので皆はハンモックにゆらゆらと寝た。わしは起床ラッパの音が聞こえず、隣の人に「わしを起こして下さい」とお願いして毎日に起こしてくれた。（兵営生活は寝るも起きるもみなラッパ）起床したら舎前整列・日朝点呼し、グラウンド2周走って整理体操の後、朝食だが、朝はなかなか満足のいく中身で焼魚一匹、大根の漬物は分厚いので歯ごたえがよく美味かった！（何しろ、わしの貧しい家はうすっぺら漬物！）あとはご飯、味噌汁も組

み合わせた。

朝食のはじまりの合図は点呼担当が笛をピーッと吹くので、わしは何も聞こえずなん困ったが、なんとか、笛を吹く時は頬が脹らんでいるのがわかった。見てコツを覚えた。その笛のテンポと同じく皆も箸をもって茶碗の上に2回上下にたたくのか？理由は神である天皇陛下へ一礼するために、国民も丈夫な身体で戦える為です。わしは焼魚を一つも残らず食べ平げるので、魚の目玉もえぐって食えた。(皆もこのように食べれるか！死んだ魚の目玉は白くなってるから不気味だと思ってるのか？わしはそうと思ってない！なぜか、国の為だし、視力もグングンとよくなって上がる！魚のエラもペロリとあの時も今も軍人から指導にあたってもらったことを有難く思っている！と参加者たちへ言ったシーン)

わしが軍需工場に働いてる席から2番目の方は足が悪くて障害者で同じく作業してたが、だいぶ年老いて45歳だった。だから、年のせいでいつも食べ残しているの上官が「誰だ！貴様らは食べ残したとは許さん！一人だけ食べ残しても皆と同じ連帯だ！」と全員も呼びかけられて一人一人ずつ後ろ向き姿勢になり、上官は「馬鹿者！！」と大きな罵声で精神棒を持ち、聴者たちは震え上がった。3回もお尻を叩き、痛みが走り、80人も！その中に17歳位の若い男性が泣き声が聞かれて上官は「なんだ！2倍もやるぞ」と3から6回に叩きこんだ。(泣かなかったら3回で済ませるが、泣いた者は6回もする！) わしだけまじめに耐えても他の人が耐えなければ意味がない。「皆は一人のために、一人は皆のために」というモットーを守らなければならない！

やがて、わしは16歳になり、2年目になろうとしたが、ある日朝起き後整列に服装点検で不注意してしまったのは襟のツメホックを外れてしまったままで上官が点呼で一人一人とチェックしたら「貴様！」と言われて体中震えた。一礼後で上官がわしの頬にこぶしを2回も殴られて見事に軍帽子までぶっ飛んだ。わしは耐えたが、気がついたらあごの骨が外れてしまって戻せないと思ったら、上官がわしのあごを戻せる位置にしたら、ウソみたいに治せたけど翌日になるとあごの部分が痛かった。わしのせいで全員まで殴ってた間は上官が殴った手が痛くて交代させた！その中に戦前から軍の工場で10、20年目に働き続けている方に殴られても慣れているおかげであごが鍛えられていたん。上官のおつとめはビンタ攻めだった。不注意をしないよう神経を集中して来たが、又、同じ班の人が軍服のポケット部分が外れてた！昨夜寝る前に軍服をチェックしてから寝る習慣なのに、雑談に夢中でしかたがない・・・全員まで体罰を受けた。こぶしで鼻にぐりぐり押しつけたら鼻血が出たやはり、長く働いていた人は鼻血が出なかった！わしみたいなら素人はよく鼻血が出たんだ。長く働いた人は昇任なくてもヒラのままで2つ星のままで・・・1年目なら一つ星、2年目で二つ星をつけていた。皆は苦しんで上官に対して深い恨みを持ち、いつかはやり返してやる！と心底に思っていた。

やっと、わしは16歳で晴れのお正月で軍服、軍帽子、二つ星を飾り、堂々な姿で実家へ帰った。家に着いたら、まず、炊事かまどに居たお母さんの所へ行った。わしはお母さんが向くまで待っていた。おかあさんが向いたら「●☆▲□？」と何度も話し掛けられた。うなずいたわしは軍隊一礼したが全然気がつかなくて笑いながら言い続けていた。わしは

やむを得ず、「☆×○●！」と奇声を出したらお母さんは「ええ？おまえ・・」と気が付いてくれて「おまえ、体が大きくなった！」と嬉し泣きでわしを抱きかえてくれた！「おまえ、二つも星をつけていたとは・・今度こそ、三つ星、剣も身につけてりっぱなヒゲを生やすんだよ」と冗談っぽく言われ、わしは「そんなことはない！ずっと殴られるし、胸章は黒い札、赤の二つ星のまままで下っ端だ！」と照れくさそうに言った。（「胸章が赤い札で黄色星なら昇任でりっぱな軍人になるが、戦死すると英雄と同じ扱いになるし、遺族年金が高い！わしみたいな人たちは戦場へ行けず、役に立たない代わりに殴られっぱなし、最低扱いされる。わしは聾啞者だからいいんだ」と参加者たちに言う様子）

煙管をくわえているお父さんにお母さんが「帰ってきたよ！息子がりっぱな体に大きくなって」と言った。お父さんが軍隊一礼したわしを見た時は「誰だ？」と言われた。わしは再び「●×☆○」と奇声を出したらお父さんはびっくりして目が丸く大きくなり、（やはり、両親がわしの聾啞者らしい奇声でも覚えてくれたのは本当の親子だな。わしが小さい時から「☆○×●」と癖のある声を出したからな）「おまえ、今度はヒゲを生やすんだな」と言われ、「イヤ、イヤ」と照れくさそうに言った。お母さんはわしが正月帰省することを知っていて縫った和服を用意してくれた。帰省する前にわしから同じ班の人に「お正月で実家へ帰ります」と伝えて手紙を書いて送ってくれた。わしは文を書けない為にお願いした。お母さんから縫って頂いた和服に着替えた。天皇の菊も紋章入りタバコも土産として持ってきた。この菊の紋章入りタバコは軍隊のみで配給になり、16歳以上で吸うのを認めた。わしはまだ吸えなかったとしても全員で菊の紋章入りタバコ1ダースを毎月配給が回って貯まった。土産としてお父さんにあげたら「おおお！初めて見たのう！菊の紋章入りタバコ！」と初めてジロジロ見てすご嬉しそうに吸った。わしは吸えるようになったのでタバコ一箱をポケットの中に入れた。

わしの隣の家は一つ年上だが17歳で小さい時はよくわしはいじめられた！しかし、赤い紙が届いてないし、飛行場あたりで土方をやっている。久しぶりに再会したわしは和服を着たので「お！軍服は？」と尋ねられ「わしの家にある。見に来い」。一緒に見に来た隣人が妬んで「おまえの首とオレの首を取り換えたい！」と言われた。久しぶりに橋の下の川で散策してタバコをくわえながら隣人が「くれ」と。「いいよ」と欲しがっていた菊の紋章入りタバコを出したら、1本目は左耳にはさんで・・又、2本目は右耳にはさんで・・あと最後の3本目は口元に機嫌良く、くわえた。

その時警察の人が来て隣人が慌ててタバコを隠そうとした。実は、昔は20歳以上で喫煙許可だったけど、わしは姿勢を変えず吸い続けて来たが、警察の人がわしの腕を捕まえようとした時は、腹が立って怒った。当時は警察より軍隊の方が身分が上だったので思わず警察の人に殴ったり、屋根の瓦も殴ったら血が出て倒れた。隣人が慌てて通告したら警察2人も来て話し掛けられてわしは菊の紋章入りタバコを見せたら警察二人が敬礼されて倒れた警察に一喝した。

この場で目撃した聴者たちは恐れて「まさか、聾者が警察を殴って勝ち取れたとは？？和服を着てるのに菊の紋章入りタバコを持っているとは？」と信じられないように話が流れたが、誰もわしは軍需工場所属していることは知らないから。だから、わしは堂々とタ

バコをくわえて歩けるから何も恐れなくなったのは小さい時惨々にいじめられたから殴り返すのが前々からの望みが叶えられたんだ。(だから今も忘れられない！分かるかい？と参加者たちに伝える様子)

お正月休みが終えて軍需工場に戻った時、防災の為に使った水カメの中からうごめいてる蚊の幼虫(ポーフラ)が沢山いて青く水が濁っているから臭い。その時運が悪くわしは朝整列で軍服のボタンを半分閉じてなかったのを見て「なんだ！」と一喝され、皆もお互いに注意が必要だったが、注意不足で手遅れだった。わしが最初の列からポーフラの湧く水かめに頭を30秒間に押しつけられ、(上官の手じゃなくお尻でわしの首に押しかけた)呼吸が苦しくて耐えられず、この水を飲めこんだため、ポーフラが口からお腹に入った。その10秒後顔を上げられた時は呼吸ができたので、鼻、耳の中からポーフラが流れ出した。もちろん、全員こうされた！このような行為は1回だけではなく何回もわしも皆も不注意で続けられた。

いよいよ激しくなってきた頃はわしが飛行機訓練所・軍需工場併設した所に空襲が多く避難する行動が一日中で何回かになって来た。工場内も揺れが大きく、特にガラスが爆撃されると飛び散った破片で斬って危険だから紙テープをバツの字に貼り付けた。それはガラス破壊防止の一つだった。爆撃されて首が飛ばされたり(外を眺めるだけでも首がどっかに飛ばされたり)並んでいた戦闘機も破壊された。

しかし、わしの所に爆撃は来なかったが、ドンドン大きな音、爆弾も怖くなったので皆が防空壕の中に隠れて逃げた。わしだけは残ってやり続けたのは何回も避難するのが意味がないし、「生きても楽しいことはない。聾啞者だから軍需工場に居ても殴られるのはもうイヤ！わしの頭に爆弾当たれば死んでもいいので覚悟してると思ってたが、弾は当たらなかった」・・・作業途中爆弾で死んだ人の首だけで前に飛ばされた時わしの軍服が血でまみれた。聴者は聞こえるからあまりに恐怖を感じるが、わしは眼だけで生き残った。結局は無事だったと今も不思議に思っている。

わしが講演する為の手元にある紙は文が一つも記入してないよ。全て絵を描いてるのを見て講演しているんだ(信じられない？うそ？本当？わっはは、見れば分かるんだなど参加者たちに講演用紙を見せたら、「本当だ！！」と驚いた様子)わしは記憶がよみがえって絵を描けたから講演できたと思う。

最後に敗戦に近くなった頃は軍航空機、機関銃が減って鉄が不足気味になり全国から集まった鉄、繊維服も出したり、協力し合ったりしたが、国民たちは犠牲を負っても戦争を勝利する為だった。(残念ながら、時間の都合で講演は終了した。参加者たちは拍手(チラチラと手を振る)再拍手の波！)

司会：時間はわずかであるので二人位で質問あったらどうぞ！！

御所園氏が思い出したように「待ってくれ 皆に質問ある！便所の蛆虫を食べる方がいいか？手を上げてくれ」と・・・参加者たちは絶句様子！！

わしは副上官がみせしめに便所の中から蛆虫を箸で50匹も食べさせられて吐き気しそ

うだったが、耐えた。他の全員も食べさせられた。わしは三日間も口の中に大便の臭いが強烈で何度も歯磨きしてやっと四日目に消えた。しかし、ゲリが止まらず、死んだ人もいた。そうとしないと個人攻撃で何度もやられたが、絶対に軍人に逆らえない時代だった。

昭和20年8月15日で降伏する前日14日に皆もわしも軍需工場の上官の2人に恨みあって皆と相談して「おまえがやれ！」とわし（79人の中に聾啞者はわしだけ）に命令され、自分を守る為に自転車の鎖チェーンを手元に回して班長室に行ったらラジオを聞いて扇風機を回していた。わしは敬礼して副上官は「なんだ？」と睨み顔して腰の剣を取ろうと・・・わしはどうぞと手振りして隣にいた人が「まもなく明日は終戦すると聞いてますが、最後の夜で皆と一緒に酒を飲みませんか」と騙して副上官が前に歩いてた時後ろにいたわしが不意打ちした後皆も次々と殴った。

最初にやったわしは聾啞者だと利用されたかもしれないのだが、殺されたくない気持ちがあった。（もし、抜けたらリンチされる）副上官が「かんべんしてくれ」と土下座しても許されず・・・79人によるリンチで死んだ後、工場の調理場だったドブ坂の下を掘って副上官の死体を埋めた。

8月15日で終戦となり、本当に辛い日々が終わった。

御所園 武雄氏からのメッセージ

「わし自身が聾啞者としての事実を語ることによって、もう二度と過ちである戦争を起こしたくない。お互い人間同士だから。特に聾両親の子が聴者だったら出征して欲しくない気持ちは皆も知るべきでそうあることを心から祈りたい」

（記録：細川かおる）